

台湾と私 (10)

## 李登輝さんの謎めいた質問

伊藤栄三郎 ● 本会理事  
新潟日報社友



伊藤栄三郎理事

産経新聞など一部報道によると、台湾の李登輝前総統は来年五月中旬ころ来日し、念願の芭蕉の「奥の細道」を歩き、日本古来の文化を研究したいという。むろん日本李登輝友の会はこぞって大歓迎するが、外務省も今回は隣国への気兼ねを止め、さる十月のアメリカ旅行同様、自由で気軽な旅になるよう毅然として対応して欲しいと思う。

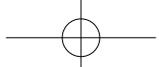
少し古い話になるが、平成十五年九月、台北で開催された台湾正名運動に参加した際、私は李登輝さんの心情の一端を垣間見たような気がする。

当日のデモは予想をはるかに超える二十数万人が参加、「台湾は中国ではない」「台湾万歳」のシュプレヒコールは、過去二、三百年、外国

勢力に抑圧された台湾民衆の雄叫びのように私には聞こえた。総召集人である李さんは術後それほど日経が経っていなかったにもかかわらず、デモの先頭に立っていた。

その夜、圓山大飯店で催された晩餐会でのことである。旧制台北高校同期という誼で、私はメインテーブルの、しかも李さんの隣の席に座らされた。緊張したのはいうまでもない。やがてセレモニーが終り会食になった時、李さんは私にすり寄って、謎めいたこんな質問をした。「観音山のテッペンを切り立ったところに立つとき、人間は何を考えるだろうか」

観音山は台北市周辺の山で、山の形が観音様の仰臥している姿に似ているところからこの名がついたという。



私は質問の内容がつかめずドギマギして「わからない」と答えると、李さんは言った。

「君は幸せなんだ。私が山のテッペンに立ったのは総統になったときだ。そこで手を合わせていると、モヤモヤしたものが消え、爽やかな気持ちになった。経験や知識ではまかなえるものではない。そのとき私は、信仰というものを初めて感じた。それから五年後にキリスト教に入信した」

この「五年」という言葉が私の耳に突き刺さった。なぜなら、彼が最も困難な危急存亡の淵に立たされた時期と付合していたからである。

一九八八年一月、副総統だった彼は蔣経国総統の急逝により総統に昇格した。ところが、当時の国民党幹部は猛反対し、党主席の座はどうしても与えてはならないと総統・主席分離問題が起こった。ハワイにいた蔣介石夫人の宋美齡は「台湾人が総統になるなんてとんでもない」と面罵したという。

正に針の筵むしろに立たされ、綱渡りの毎日だったと推測する。しかし、時の流れに抗すること

はできないものだ。七月、党中央常務委員会で主席に選ばれた。そして、中国では天安門事件が発生し、台湾でも学生が大挙して万年議員廃止を要求するなど、こうした騒がしい中の一九九〇年、李さんは第八代総統に再選された。

司馬遼太郎との対談で「台湾人に生まれた悲哀」を語ったのはこの少し後で、彼の苦しい心情がよく表れていると思う。

李さんの目線は常に人民に注がれている。過去三百年、一貫して外国勢力に抑圧されて来た台湾人の苦しみ、それに戦後、怒濤のように侵略してきた国民党軍の飽くなきまでの弾圧等を目の当たりにして来た李さんは、二度の米留留学を経て、真の民主主義とは何かを体得したのだろう。「民主の父」とか「日台を結ぶ絆」とかいわれるが、話していて清々しさささ感あを感じる。「余生を台湾に捧ぐ」という信念が一日も早く結実することを祈って止まない。

最後になったが、来日の折はぜひ新潟に立ち寄っていただきたい。李さんのファンは日本の片隅にもいるのだ。